第3種郵便物認可　京　都　新

金襴マスク心明るく

京の織物会社 疫病退散願い

西陣織の金襴（きんらん）の技法を用いたマスクを京都市の織物会社が発売した。新型コロナウイルスの感染拡大で暮らしに欠かせなくなったマスクを華やかにして、沈みがちな気持ちを明るくするとともに、伝統工芸にも目を向けてほしいという。疫病退散に効験があると言い伝えられる妖怪アマビエの図柄を織り出した布も手がけ、マスクとともに人気だ。

金襴のマスクを着けながら、金襴で作ったアマビエを見せる岡本絵麻さん（左）と圭司さん＝京都市上京区・岡本織物

疫病退散の言葉が添えられた金襴のアマビエ ▶

金系などで柄を織り出す金襴は、僧侶の袈裟（けさ）などに使われている。マスク姿が町中に増える中、西陣織工業組合加盟の岡本織物（上京区）の岡本絵麻専務（47）が金襴での作成を発案した。

クワガタなどをモチーフにした虫や、麻の葉、雪の結晶などをあしらった。4月に売り出して以降、各地から注文が相次ぐ。目が粗いため、ウイルスや花粉などから身を守る機能は期待できないという。絵麻さんは「一般的なマスクの上に着けるなどしながら、ファッションとして楽しんでほしい」とする。

アマビエ図柄の布も人気

会員制交流サイト（SNS）で話題になっている妖怪アマビエも金襴で織った。妖怪に詳しい水木しげる記念館（鳥取県境港市）によると、アマビエは江戸時代の瓦版に描かれた半人半魚の妖怪で、熊本の海に現れた。病が流行した際には「私を描いた絵を見せよ」と告げたと伝えられる。

アマビエをあしらった布は横70センチ、縦33センチ。疫病退散、無病息災といった言葉を添えた。タペストリーとして壁に掛けたり、一部を切り取ってお守りにしたりして使われている。

近年、葬儀の簡素化などで金襴の需要は低迷気味な上、新型コロナの影響で袈裟などが欠かせない法要の減少も懸念される。社長の圭司さん（47）は「技を後世に残すため、新たな需要を生み出しながら、多くの人に知ってもらえるようにしたい」と語る。

柄が12パターンあるマスクは2980円と3180円、アマビエの布は1万2千円。いずれも同社サイトで扱っている。

（陰山篤志）

京北の魅力や情報 観光客目線マップ

商工会女性部

京都市右京区の京北商工会女性部（大栢柳子部長）が、京北地域の魅力や情報を観光客目線で紹介する「京北観光お助けマップ」

祇園暴走事故8年

犠牲者に花手向け

元同僚ら在りし日偲ぶ

2012年に京都市東山区・祇園で軽ワゴン車が歩行者らをはねて7人が死亡、12人が重軽傷を負った事故から8年を迎えた12日、現場では犠牲者の元同僚らが花を手向け、在りし日の姿に思いをはせた。

12日朝、冷たい雨が降る中、多くの犠牲者が出た同区の大和大路通四条交差点にはヒマワリなどの花束が供えられた。

祇園暴走事故の現場で、供えられた花に手を合わす脇田さん（京都市東山区大和大路通四条交差点前）